

マガレイの価格形成状況からみた価格対策について

福島県水産試験場漁場環境部
平成17, 18年水産試験場事業報告書
分類コード 19-03-15000000

部門名 水産業－利用加工－市場・流通
担当者 岩上哲也

I 新技術の解説

1 要旨

主要カレイ類、ヒラメが資源増大期に入っている。小型魚の混獲が増大し、全体の価格を押し下げ、近時の価格低迷に拍車をかけることから、この対策が必要となっている。マガレイを例に取り、全国生産、消費地市場動向や産地の日々の数量と価格形成の情報を整理し、また前述の事象を数値的に捉え問題点を抽出し、価格対策のいくつかの方向を示した。

(1)水揚げ処理限界量

マガレイさし網漁の最盛期である1～3月の日々水揚げと平均価格の変動から、調査市場の1日当たりマガレイ取引量に限界が見受けられた(図4)。

(2)大量水揚げ時の価格形成

前述同期同漁法のマガレイ日々価格組成から、大量水揚げ時には低価格魚の比率が増加し、高値価格帯が形成されずらくなる関係が見られた(図5)。

(3)対策案

○小型魚等の水揚げ量を抑制:1日当たり、1週間当たり水揚げ総量の制限、計画生産量制度などで、安定生産、安定感産地イメージを高める。

○夏～秋の索餌期(肥満度が高い時期)の高品質を武器とし(図6)、活魚並の扱いによる、高品質、高鮮度(ブランド)商品確立により、購買意欲を喚起する。

○刺身需要、加工需要を喚起し、生食用(大型魚)、加工用(底曳小型魚:凍結、冬加工)などはっきりした用途別販売形態を進める。

○自家加工を奨励し、半加工品販売(内蔵抜き、塩蔵、切り身)なども検討する。

2 期待される効果

(1)地域経済的效果と資源維持管理効果が期待される。

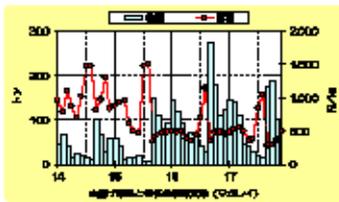
3 適用範囲

水産行政、漁業者

4 普及上の留意点

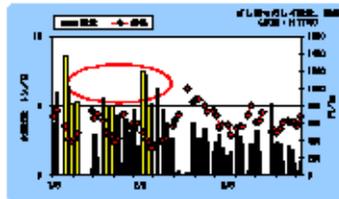
(1)量および質の両面から販売対策を進める必要があり、「獲る人」と「売る人」の融合の方向で検討が必要である。また、実例づくりが大事である。

II 具体的データ等



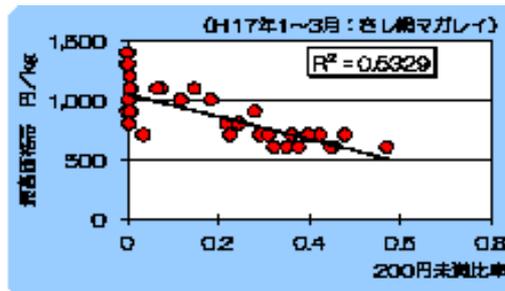
水揚げ数量、価格に季節変動があり、近時多獲期に入った。

図1 水揚げ量と平均価格の季節変化



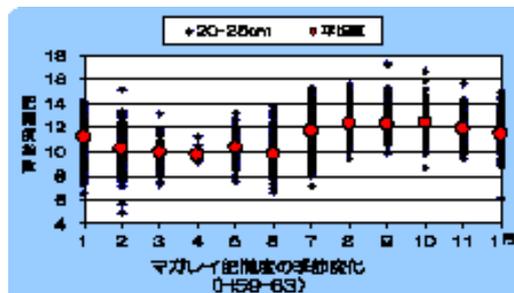
当漁期には、取扱い量の限界(5トン)があったと思われる。

図2 平成17年漁期の水揚げ量と平均価格の推移



安い魚(小型魚、低品質魚)が多額を占めると、価格差が小さくなり、高値がでなくなる。

図3 低価格魚の量と高価格帯の関係



肥満度に季節変化があり、肥満度の高い秋～冬は販売戦略の武器になると思われる。

図4 肥満度の季節変化

III その他

1 執筆者

岩上哲也

2 主な参考文献・資料

(1)東京都中央卸売市場資料